

## 平成 12 年度分野別研究組織 研究成果の概要

### 日本近代文学における書誌学的考察

村田好哉

インターネット技術の進展に伴い研究文献の検索方法も様変わりしつつある。図書館に出かけて目録カードをめくりながら目的の文献を探していた時代はすでに過去のものとなりつつあると言えよう。作家の自筆原稿や草稿・メモの類を多数所蔵する日本近代文学館では煩雑さと費用の面などからパソコン入力による資料のデータベース化は、いまのところ行われてはいないが、国会図書館を始めとして他の多くの公立図書館や大学図書館では、インターネットで自宅や研究室・最寄りの図書館からオンラインで情報検索を利用するということがごく自然なこととして行われるようになったのである。

国文学の分野では国文学研究資料館において、1940年から2001年までの約60年間に学会誌や大学紀要・同人誌等に発表された国文学関係の雑誌論文を中心に現在のところ33万件を超える目録データの整備がなされている。2001年4月からはインターネットを利用したWeb検索も可能となり、利用者の便宜も図られた。ちなみに日本近代文学で最も研究文献が多いとされる夏目漱石では2003年1月の時点で、5370件にも及ぶ多くのデータの登録が行われている。この他にも森鷗外3344件、宮沢賢治2946件、芥川龍之介2890件などといった膨大な文献データの蓄積がなされているのである。なお単行本に関しては国会図書館のNDL-OPACが充実している。試みにNDL-OPACで「漱石」を検索すると1776件もの情報が登録されている。すなわち国会図書館には夏目漱石関係の和図書が少なくとも1776冊所蔵されているのである。国文学の分野では自然科学の分野などに較べて文献の寿命が比較的長いと考えられてきた。このため過去の研究文献データの整備が求められ、その試みは従来より繰り返しなされたきた。またそれらの地道な作業の蓄積をふまえることによって研究の新たな展開が可能となってきた歴史がある。

研究や情報の東京一極集中現象が言われてから久しいが、インターネットを効率よく活用することにより、東京在住の研究者以外にも研究情報共有化への可能性が開かれたことが指摘できる。2002年10月から国会図書館関西館の利用が開始されたことは、その可能性をさらに高めることにつながるといった意味でも画期的な出来事だと言えよう。膨大な論文、資料といった研究情報を効率よく収集し、研究の現状を的確に捉えるための最適な道具の1つがインターネット技術であり、その必要性は今後ともますます高まることであろう。それゆえにインターネットの問題点を十分にふまえた上で研究資料を有効に活用しながらも自己の研究課題解明にとっての最適な方法を身につけ、さらに実践する能力を養うことがこれまで以上に研究者個人に強く求められているのである。